

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4290101304		
法人名	社会福祉法人 致遠会		
事業所名	グループホームサンハイツ西町 いろり棟		
所在地	長崎市白鳥町2-26		
自己評価作成日	令和 5年3月2日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/42/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構
所在地	長崎県長崎市宝町5番5号HACビル内
訪問調査日	令和5年3月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症のご利用者様が「自分らしい生活、安心できる生活を送っていただく。」を目標にサービスを提供する。ご家族様や地域の皆様の協力を仰ぎ一体となってご利用者様を支えている。身体的・環境的な理由、もしくは感染症などが原因で面会や連携がとりづらい状況でもオンラインを利用して、いつでもご利用者さんとの関りを維持できるよう努めている。また、大きな課題でもあるICTを活用した他機関との連携を前向きに検討し取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、静かな住宅地に位置している。リビングでは、窓辺で寛ぐ利用者や塗り絵、俳句や計算ドリル、トランプと利用者自身が好きなことに取り組んでいる姿があり、理念の一つである「豊かに、安らかに、自分らしい生活」が具現化されていると実感できる。廊下には、職員による心のこもった飾り付けを施し、季節感を演出していることが伝わってくる。昨年度は、浴室にバスリフトを取り付け、介護度の高い利用者であっても浴槽に浸かることができるようになり、利用者に喜ばれている。また運営面では、複数の委員会を組織し、職員自ら企画書を作成しており、ボトムアップの仕組みを確立していることは特長といえる。介護ソフトを導入し、情報の共有化がより正確かつ迅速にできるようになったことも特筆すべきである。職員同士チームワーク良く、毎日の支援に取り組んでいる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	申し送りでサンハイツフィロソフィの輪読を行っている。申し送りがなくても個人で黙読している。感染拡大予防のため、集合しての申し送りは中止している。	事業所では理念の浸透のために、朝礼時やフロア会議時に“サンハイツフィロソフィ”の輪読を行っている。新人職員には、オリエンテーションにて理念の周知を図っている。職員は、利用者の好きなことを尊重し、豊かに自分らしく過ごすことができるよう支援を行っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	運営推進会議で地域の方との交流を行っていたが、開催できていない。	事業所では自治会に加入し、令和3年度は班長を務めている。また事業所は、町内の防犯連絡所となっている。コロナ禍以前は、実習生の受け入れを行ったり、町内の子ども神輿が玄関先に訪れていた。コロナ禍収束後は西町まつり等地域の行事に参加したい意向である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域代表者を運営推進会議へお招きし、身体拘束適正化委員などの報告を行い、ご家族代表者からの要望、希望、お話や活動報告などを通して共通理解を頂ける様努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ご家族代表から様々な、意見や要望を頂きサービス向上の一助にしている。	運営推進会議は現在書面で行い、委員からの質問には個別に回答している。清掃や食事への意見を実践に役立っている様子が窺える。令和5年度からは対面で奇数月に開催することになっている。ただし、書面会議にて委員から上がった意見や質問及び回答を他の委員に伝えていない。	運営推進会議で収集した委員からの意見とそれに対する事業所の回答を委員全員で共有することで、更なるアイデアや意見が出て実践に役立ることが期待できる。共有する仕組みづくりが待たれる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	定期的に運営推進会議へ参加頂き行政からの意見を頂く様にしている。	行政からは、マスク等の支給を受けている。事故の報告は、事業所から法人本部、市担当課に行っている。包括支援センターや保健所との連携も確認でき、長崎大学病院の感染症の研修をオンラインで受講し、事業所全体で共有して利用者の支援に反映している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	チェックリストを使用し周知・徹底している。	身体拘束については身体拘束委員会を組織し、チェックリストを用いてユニット毎に検討を行っている。令和4年度は4回開催し、特にスピーチロック対策に力を入れていることが確認できる。また職員一人ひとりが、不適切ケア自己チェックシートを使って自己の支援の振り返りも行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止についての資料を遣いフロア会議にて周知している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	フロア会議で成年後見制度の後見人と保佐人について指導している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者、計画作成担当者が責任を持って行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎年、敬老会(ご家族参加)や面会時などにご家族からの要望は聴取し、意見等頂いた際は必要に応じて改善するようにしている。年に一度はアンケートを実施している。	利用者の家族への報告は、3ヶ月に1度の便りに近況報告の写真を添えて送っている。Zoom会議やビデオ通話による利用者と家族の交流時に家族の意見を聞き取り、個人記録に記載して支援に役立てている。バスリフトの導入は利用者大変好評を得ている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月フロア会議を開き意見交換の場を設けている。	事業所では職員で構成する5つの委員会があり、それぞれの委員会は管理者に企画書を提出している。委員会の声が反映されることが多く、風通しがいい職場であることがわかる。年に1度、管理者と職員の個人面談があり、職員からの意見を集約する仕組みがある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	実施している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	マニュアルを活用し実践するよう心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会のCブロックの会合及び各種研修への参加をしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	他利用者とも会話の橋渡しを行い、関係づくりをしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約時にサービスの説明を行い、出来ること出来ない事等をお伝えし納得して頂く様努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	グループホームで利用可能なサービスの紹介(自費レンタル等)必要に応じて利用出来る様支援している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ストレングス本人の強みを生かしたサービスの提供を心がけ実践している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族のご意向に耳を傾け、サービスの組立てを行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	感染症拡大予防のため、外出できていないが、テレビや電話を活用して関係が途切れないように努めている。	新型コロナ禍の中、人や場との関係継続は難しい状況が続くものの、タブレットを利用しテレビ電話で家族とコミュニケーションを図っている。入浴時に聞き取った本人の生活歴の情報は、職員間で共有している。経理の仕事に就いていた利用者には計算ドリルを勧めており、入居前の暮らしが継続できるように支援を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ご入居者を巻き込みながら日々業務を組立て実践している。離床時間が長く取れない方であっても食事以外に、10時、15時にお茶の時間を設けリビングにて過ごせるよう工夫している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現在入居の方の親族娘の舅様が以前ご利用で有ったが、しばらくして実父にご入居頂いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人の意向を重視し対応している。	職員は、利用者の尊厳に配慮した声掛けを心掛けている。年々、本人の思いや意向の把握は困難になってきており、職員は利用者とのコミュニケーションを図るため、さまざまな方法を試みている。筆談も困難な場合は、本人のこれまでの言動や背景から察したり、家族に尋ねたりして、支援に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ケアマネからの情報や、ご本人、ご家族からのお話を十分に聞くようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	アセスメントシートにてADLはもちろん好みや、趣味などを可能な限り反映出来る様努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者が作成したプランを基にフロア会議等で周知、見直し等行っている。	利用開始時に生活歴を把握し、今後の希望を探り暫定プランを立て、半年毎にモニタリングを行い、介護計画を作成している。法人全体で介護事業所支援ソフトを設置しており、本事業所も各フロアにノートパソコンやタブレットを設置してソフトを活用し、利用者の状況を記録し、職員間で把握し共有している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録への記録、業務日誌への記録、必要に応じて申し送りノートへ記入し実践しているが、プランの見直しにまでは至っていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	自費レンタル等必要に応じ対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	感染症拡大のためイベントが中止。参加できていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	最低月1回は定期受診を行い必要に応じて適切な医療が受けられる様、主治医、担当医、訪問看護との連携をとっている。	事業所ではかかりつけ医の継続を薦めているが、遠方で受診が難しい場合は近隣の医療施設を紹介している。毎週金曜日に訪問看護師が訪れ、利用者の健康状態を確認している、また提携の歯科医が訪問し口内の状態をチェックしている。内科以外の皮膚科、眼科、外科等は、職員が通院支援を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に1回訪問看護との医療連携を行い、状態把握、連携、情報の共有に努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	ご入院される場合は介護サマリーを作成し入院先へ届け、お見舞い、退院時には看護サマリーにて治療内容、経過等把握に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期ケアについては、主治医より説明後、看取りプランへの変更を行い医療・看護・介護・ご家族と共に看取りが行えるよう支援している。	入居前に家族に終末期に向けた方針を説明し、同意書に署名を得ている。緩和ケア、延命治療について、本人の状態の変化に応じ、家族と変更も見据えて話し合っている。ターミナルケアでは、事業所は、最期の時間を大切にしてもらいたいとの配慮から、家族の宿泊も可能であり、一時的に利用者が自宅に帰宅した事例もある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救命救急の研修参加を以前はしていたが今は行っていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている。	避難訓練、防災訓練等定期的に行い、防災意識の向上・周知に努めている。	毎月火災や災害対策の訓練を実施し、年2回は、利用者も一緒に避難訓練を行っている。利用者が避難済みかどうかを居室の名札の位置により区別する工夫がある。非常持出用の利用者のファイルを備えており、非常食は、法人本部に保管している。ただし、夜間想定訓練は、シミュレーションのみで実際の訓練は行っていない。	夜間は、職員数が少ないため、自然災害時に利用者が安全に避難できるよう、全職員が訓練でその方法を習得することが重要である。実際の訓練の実施が待たれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	声かけは依頼系で行うよう指導している。	管理者は、職員に対して重要事項説明書等を説明しており、利用者の人格の尊重等について注意喚起を行っている。職員は、採用時及び退職時に守秘義務の誓約書を提出している。利用者の書類は事務室に保管し、個人情報の取扱に注意している。パッド類は、目に付かない場所に収納し、羞恥心への配慮が確認できる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	声掛けを依頼系で行う事でご本人の意思確認を行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	各ご入居者のペースで生活出来る様配慮している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	離床時には必ず髪を整えるなど配慮している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	各ご入居者に合わせた食事形態・食器やスプーンなど準備し、トロミや好き嫌いなど対応している。	食事は配食サービスを利用している。利用者の嗜好やアレルギーは、入居時に家族や本人に聞き、代替食で対応しており、とろみ食も可能である。中庭で野菜を育てたり、近隣からの差入を献立に加えることもある。外国籍の職員による自国のおやつや敬老会の刺身、誕生会のケーキ等、食事が楽しい時間となるよう工夫が窺える。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分量の把握に努め、少ないと感じた時には回数を多く提供するなど工夫を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後には必ず口腔ケアを行い、不十分な場合は声かけ、介助している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ご本人に合わせた排泄を心がけ、適宜対応している。介護用品もご本人に最適な物を選択している。	昼間は、トイレでの排泄を基本としている。下着の上げ下ろしも、できる限り利用者の力を尊重して支援している。令和4年11月に介護ソフトを導入し、利用者の排泄の状況等の共有がより容易になっている。病院を退院後、歩行訓練を行い、排泄の自立に繋がった事例がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄管理を行い、本人に合わせた方法で3日で排便出来る様主治医と相談の上行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	体調不良などの理由により、入浴できない場合は代替として清拭を行っている。	令和4年9月にバスリフトを導入し、介護度の高い利用者も浴槽に入ることができ、利用者に好評である。週に2回以上の入浴を目標にし、更に毎日の清拭により清潔保持に努めている。自分で体を洗うことのできる利用者には、そっと見守る体制を取る他、同性介助の希望にも応えており、利用者本位の支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	持込の寝具や睡眠時無呼吸(BI-PAP)への対応、機材の管理を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	必要に応じ、定時・臨時に限らず確実に服用出来る様支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	お手伝い可能な活動への参加、季節ごとの行事への参加していただいている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染拡大予防のため、ドライブ外出はできていない。	現在、新型コロナウイルス感染予防のため、利用者全員で外出することは控えている。晴れた日は、日当たりの良いウッドデッキで日光浴し、中庭の草花を鑑賞している。家族からの自宅への外泊の希望には、状況を見極めて判断し実施している。廊下には、季節の飾り付けを行い、利用者の気持ちが明るくなるよう配慮している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	実践できていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	個人で携帯電話を所有されている方が居る。ご家族からの電話にはご本人とお話ができる様している。家族からの手紙は本人へお渡ししている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は基本的に、スペースの許す限り自由な環境づくりが出来る様支援している。	リビングでは、利用者がランプや絵画、俳句作り、折り紙とそれぞれが思い思いに過ごす姿がある。窓際で日向ぼっこしている利用者もいる。テレビは、各階で好きな番組を視聴しており、廊下には、利用者の写真や書道の作品、季節の飾り付けがあり、楽しい空間となっている。共用空間は、職員の清掃により清潔を保持している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングソファや廊下のベンチなど自由に座って頂ける様にしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	実践している。	家具等の持ち込みは自由であり、自宅から持ち込んだテレビや位牌を置いている居室がある。壁には、家族の写真等を飾っており、会話の糸口となっている。収納のスペースも十分にあり、居室内は職員により整理整頓していることが見てとれる。職員による空調管理や清掃で居室内は快適な空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	基本的に自力で移動可能な方には自由に行き来出来る様にしている。		